宇大農場 真岡移設40年

専任教員が座談会

宇都宮大農学部付属農場は、今年創設100周年、現在の真岡市に移設してから40年目を迎える。東京ドーム約21個分の面積（約101㌶）を誇る国内最大級の大学付属農場では、広大なフィールドを生かした多彩な教育・研究活動が展開されている。地域の拠点として更なる飛躍を目指す付属農場について、長尾慶和教授（61）、高橋行継教授（62）、池田裕樹助教（36）の3人の専任教員が座談会で、農場での取り組みと今後の抱負について語った。【宇都宮大農学部付属農場取材班】

地域と関わり 農業広めたい

とちぎキャンパる

――付属農場の研究室ではどのようなことに力を入れていますか？

池田　園芸作物の中でも野菜に焦点を当てて、トマトやタマネギの生産性を上げるための研究をしている。農場の広大な畑を使って、園芸作物をミクロな面からマクロな面まで幅広く扱っている。

長尾　生殖学を専門に研究しており、家畜の遺伝的改良や効果的繁殖を目的に、精子の凍結や人工授精などの技術を開発している。また、牛の卵子の中に針を入れて直接受精させる顕微授精の技術で、受精に関するさまざまな現象を明らかにすることができる。現在、日本の大学で顕微授精による牛の産子を得ているのは宇都宮大だけだ。また、顕微授精は家畜だけでなく、ヒトの不妊治療問題にも応用できるのが強みだ。

高橋　ムギやコメなどの作物栽培における省力化・低コスト化に向けた技術の確立を目指している。現在は農業従事者が高齢化し、細かい農作業をするのが労力的に難しくなっている。最近では大規模経営も始まり、時代と共に変化する農業形態に応じた技術開発をしている。

――研究室の所属学生に対して指導する上で大切にしていることは何ですか？

長尾　ほとんどの学生が大学院に進学するので、3年半ほどかけて、自分自身の良さをしっかり認識すること、同じように他人の良さを見つけて、そのことに敬意を持ちながら人と協調して生きていくことができるように指導をしている。

池田　農学部の学生は、1、2年生の時に農場実習で園芸作物の栽培を扱う。どうしても実習では種をまくところから、作物を収穫するまでの一連の流れを全て学ぶことはできない。そのため研究室では、一から最後までの作物栽培を完遂する能力を養うことを一番大事にしている。

高橋　4年生の卒業研究は、社会に出て仕事をすることと基本的な構図は同じ。目標やテーマを決めて、それに対して実行して結果をまとめるという過程は共通している。だから、学生には社会に出るためのトレーニングと思って取り組んでほしい。

――農場の生産物をどのようにPRして、発信していきたいですか？

高橋　付属農場で育てた水稲品種「ゆうだい21」は、コシヒカリ同様、独特の粘りをもち、味もおいしい。しかし、栽培するためには高度な技術が必要。多くの農家で栽培してもらうために、引き続き全国各地で技術指導をし、多くの人に食べてもらいたい。

池田　農場で育てた農産物を使ったメニューを宇都宮市内のレストランで提供したり、県内のプロサッカーチーム栃木SCとコラボして試合会場で販売したりする中で、PRしている。今後も地域と連携した取り組みを続けていきたい。

長尾　農場の乳用牛は全国でも珍しい放牧飼養で管理され、そこで作られた生乳は非常に高品質。「純牧」というブランド名で、生乳100％の牛乳、チーズ、バターなどさまざまな乳製品を販売している。今後は、2020年12月に統一化した付属農場農産物のブランド「うぶ」と、従来の乳製品のブランド「純牧」の2本柱でPRしていきたい。

――今年真岡移設40年目を迎える付属農場の価値はどのようなところにあると考えていますか？

高橋　農学部の基盤になるのはなんといっても実際の農業。付属農場は農業をじかに学ぶことができる重要な場所だ。宇大の基盤教育科目では、農学部以外の人にも付属農場で実習を通して学ぶ機会を提供している。これまで以上に農場に足を運んでもらい、ぜひここで農業を学んでもらいたい。

池田　農学部の学生でも作物の栽培や畜産の飼養管理ができる人は少なく、そのような人材が今重宝されている。付属農場は、これらの技術を学ぶ現場として非常に高い価値があると思う。

長尾　宇大の付属農場は、数ある全国の大学付属農場の中でも扱っている分野が多彩。畜産、園芸、作物、機械、流通などさまざまな分野を学ぶことができる。ここで食や環境、生命について実体験を通じて学んでほしい。

――UUエコファームカレッジなどの地域貢献活動を実施してみてどのように感じていますか？

高橋　地域の方々は付属農場の地域貢献活動を通した大学との触れ合いや交流を楽しみにしてくれている。今後も学生の教育に加えてシニア世代や子どもたち、地域の幅広い世代と関わりを持つことで大学の存在価値をアピールしていきたい。

池田　農場での体験活動は子どもたちがとても喜んでくれる。農業に関心をもつ若者が減少する今、これらの活動を通して農業に興味を持つ子どもが増えてくれたらうれしい。

――広大なフィールドを持つ付属農場をどのように発展させていきたいですか？

長尾　この農場でできる体験にはここでしか得られない感性、人生の豊かさが詰まっている。だからこそ、ここで多くの人に農業を体験してもらいたい。農場を通した地域住民参加型のイベントの開催に始まり、付属農場生産物のブランド化を推進するなど、学問以外の場でも活躍していきたい。

――ありがとうございました。

◇座談会を終えて

取材班が付属農場に足を運ぶのは、今回が初めて。目の前に広がるフィールドの広大さは、予想をはるかに超えていた。3人の先生は「つながり」を大切にしているように感じた。他人とつながりを持って研究し、農業で地域とつながる。今年真岡移設40年目を迎える付属農場の偉大さと価値を実感できた。

取材班は、臼井彩乃▽大坂下侑▽川戸宏哉▽若松詩（いずれも宇都宮大地域デザイン科学部1年「地域メディア演習」履修者）

座談会をした池田助教、高橋教授（左から）、長尾教授（右端）

UUエコファームカレッジ

付属農場内の水田と畑の一部を農薬や化学肥料を使用せずに栽培する有機農業の実践の場として一般に開放し、付属農場の教職員の助言を受けながら市民が自主的な管理運営の下で、農作物栽培に取り組んでいる。

◇出席者プロフィール

長尾慶和教授

ながお・よしかず　東京都出身。帯広畜産大大学院畜産学研究科獣医学専攻修士課程修了。雪印乳業受精卵移植研究所在職中に北海道大で博士（獣医学）取得、宇都宮大農学部教授兼付属農場長。

高橋行継教授

たかはし・ゆきつぐ　千葉県出身。東京農工大大学院連合農学研究科生物生産学専攻博士後期課程修了、博士（農学）。宇都宮大農学部教授兼付属農場長。

池田裕樹助教

いけだ・ひろき、愛知県出身。東北大大学院農学研究科資源生物科学専攻博士後期課程修了、博士（農学）。宇都宮大農学部助教兼付属農場。

学生こらむ

人によって魅力は違う

かわと・ひろや。宇都宮大地域デザイン科学部1年、京都府向日市出身、趣味は旅行。

地域の「魅力」というと、たいていはイメージが先行しがちである。私の出身地である京都府はその代表例である。実際は異なることが多いが「古都」「和」といったイメージが強い。このイメージが限られた地域でしか当てはまらないことはあまり知られていない。

自分にとって宇都宮＝ギョーザのイメージは強く、他に思い浮かばない。だが、実際住んでみるとギョーザの色は想像よりも薄かった。一方で、整備された道路と交通量の多さに驚かされた。多くの人が暮らす活気ある街がそこにあった。アクティブな若者であふれているのである。

これを魅力と捉えるかは人それぞれだと思うが、私は間違いなく魅力を感じた。自分と同世代の人が周りにたくさんいることに居心地の良さを感じたからだろう。

しかし、自分と違う境遇で育った人であればどうだろうか。例えば、もっと若者が多い街で育った人であれば、この点を同じように捉えることはできないはずである。人によって魅力に感じる点や魅力の感じ方は違う。

最近の自治体の広報を見ていると、この点を無視して、魅力を押し売りしているように感じてしまう。魅力を掘り起こしてもらうには、一部を切り取って見せるのではなく、負の面も含めて全体を見せる必要があるだろう。

自分が気づいた新たな魅力を今後も積極的に発信したいと思う。

【川戸宏哉】

問い合わせは:tochigi-campal@mainichi.co.jp